

報 告

市民に向けた実践
——九州大学台湾スタディーズの取り組み——

前原 志保

はじめに—九州大学 台湾スタディーズについて—

第1節 台湾事情 (Taiwan Today) 全五回の概要

第2節 オンライン化の波及効果：「映画を通して見る東アジア」

おわりに—これからの展望と課題—

(要約)

九州大学台湾スタディーズ・プロジェクトは、日本国内で三つ目の台湾研究講座として、台湾教育部の支援と台北駐福岡経済文化弁事処の協力を受け、九州大学人間環境学研究院（教育学部門）に開設された台湾研究機関の一つである。本報告では、九大台湾スタディーズが市民に向けて実施している「台湾事情 (Taiwan Today)」と、その波及効果としてスタートした「映画を通して見る東アジア：今みんな考えるべき問題とは」を中心に紹介する。

はじめに—九州大学 台湾スタディーズについて—

九州大学 台湾スタディーズ・プロジェクト（九大台湾スタディーズ）は日本国内では早稲田大学、大阪大学に続く三つ目の台湾研究講座で、台湾教育部の支援と台北駐福岡経済文化弁事処の協力をうけ九州大学 人間環境学研究院（教育学部門）に開設された台湾研究機関の一つである。2017年10月、九州大学総長と台北駐福岡経済文化弁事処長との間で覚書の調印が行われ、そこから第1期3年の計画を開始、その後第1期の結果を受けて継続補助得て2020年10月から第2期3年をスタートさせ現在5年目にあたる。九州・山口地域での「台湾研究」の学術推進、また同地区での優れた台湾研究人材の育成を目標としており、主な活動内容は（一）本学における全学に向けた台湾関連科目の設置（二）台湾研究を行う若手人材の育成（三）日台間、そして台湾研究を通じた世界各地の研究者間の学術交流促進、日台学生間での交流促進（四）国際シンポジウム、一般向けの公開講座、講演会の開催などで、すでにその授業（基幹教育科目の一つである「台湾事情」と8日間の台湾現地滞在での学び「台湾フィールド・ワーク」）、イベント（「映画を通して見る東アジア：今みんな考えるべき問題とは」）の参加傾向からも多領域の研究推進に不可欠な台湾の社会、文化、歴史に関する知見を提供しており、大学内そして地域の台湾理解推進のため今後ますます重要になっていくプロジェクトだ。本報告では、九大台湾スタディーズの市民に向けた実践という部分に焦点をあて一般公開を行なっている「台湾事情 (Taiwan Today)」の全五回の内容と「台湾事情」の波及効果としてスタートした「映画を通して見る東アジア：今みんな考えるべき問題とは」の運営を中心に紹介する。日本台湾学会第23回学術大会公開オンラインシンポジウム時は「台湾事情」に関しては第四回まで、「映画を通して見る東アジア」に関しては第一回までの説明だったが、「台湾事情」の第五回が2022年1月に、「映画を通して見る東アジア」第二回が2022年3月に終了したため、この報告にはその情報を追加し

ている。

第1節 台湾事情（Taiwan Today）全五回の概要

台湾事情は、当初毎年12月、もしくは1月の土日祝日に行われる主に学部1年生、2年生が受ける基幹教育科目（一般教養科目）の一つとして開設されたものである。毎年その内容は異なり、毎回その年にあったメインテーマを決め講師を招聘している。対面では朝10時頃から夕方18時頃まで丸々2日間、オンラインの場合は対面と同じようなタイムスケジュールでは集中力が続かないと考え4日間とし、ただし朝8時40分からのスタートで午前中には終了し参加者が午後には別の予定をいられるような時間設定とした。2018年1月に行われた第一回は単位化の学内手続きが間に合わず公開講座となったが、第二回からは単位化が可能となり、理系、文系を問わず多くの学部生が受講している。場所は、第一回は参加者にとって比較的交通の便の良い九州大学が保有するキャンパス外施設である西新プラザを選び、第二回、第三回は九大伊都メインキャンパスにて開催、そして第四回、第五回はコロナ禍での開催であったため、全面オンラインとなった。各回のメインテーマとキーワードは表1にまとめている。台湾事情の市民への一般公開は第一回目から継続しておこなっており、毎年参加するリピーターも多い。

表1 台湾事情のテーマとキーワード

	メインテーマとサブテーマ	キーワード
第一回 (2018.01)	【メインテーマ】 「台湾の先駆者（フロントランナー）から話を聞く」 【1日目】 「台湾の先駆者的企業から学ぶ」 【2日目】 「日台間の歴史、そして現在を知る」	観光 / 自転車産業 / 地方創生 / 日台歴史 / 台湾アイデンティティ
第二回 (2018.12)	【メインテーマ】 「台湾を知り、日本を知る」 【1日目】 「台湾の歴史と多様性を知る」 【2日目】 「沖縄・台湾・アイデンティティ」	観光 / 日台間の歴史 / 日本統治期 / 戦後台湾政治史 / 沖縄と台湾
第三回 (2019.12)	【1日目】 「台湾修学旅行を“社会科学”する」 【2日目】 「東アジアのナショナリズムを考える」	台湾と香港のナショナリズム / 日本統治期の建物 / 台湾修学旅行 / 外省人アイデンティティ
第四回 (2020.12 2021.01)	【メインテーマ】 「疫病と台湾：今 / 昔」	日本統治期 / 台湾史 / インフラ建築 / 疫病と原住民 / 疫病と民間信仰
第五回 (2022.01)	【メインテーマ】 「多角的に見る台湾アイデンティティ」	台湾の「日本時代」 / 新移民 / 兩岸関係の政治・経済 / チャイナファクター / 台湾児童文学

各回の授業構成は、台湾に関する授業を初めて受けるという学生や参加者にも配慮を行い「台湾入門」的な要素を必ず取り入れつつ、その年の旬なテーマも盛り込むように考えている。

第一回目は、全体テーマを「台湾の先駆者（フロントランナー）から話を聞く」とし、講師と

してジャーナリストで元朝日新聞台北支局長、現在大東文化大学に在籍している野嶋剛氏、歯科医でエッセイストの一青妙氏、そして自転車メーカーとして世界最大の規模とシェアを誇るGIANTの元CEOで、自転車新文化基金会会長の羅祥安（トニー・ロー）氏をお迎えして開催した。第一回目は、学部授業として単位化されていないことから教育的観点から比較的自由になることができ、九大台湾スタディーズにとっての初めてのイベントということもあり、幅広い客層に興味を引くようなトピックを選んだ。野嶋氏には、「日本人にとっての台湾」という台湾入門的テーマと「銀輪の巨人ジャイアントとは」というGIANTという企業を知るための予備知識的な講義をおこなっていただいた。羅氏には自転車を単なる移動手段として捉えるのではなく、エコで省エネであること、人々の健康に寄与すること、サイクリングイベントを通じた地域活性化に貢献できることなど、自転車が生み出す様々な新しい付加価値についてご講演いただいた。一青氏は「わたしの台湾アイデンティティ」と題してお父様の話、そしてご自身のご家族の話についてお話しいただいた。

第二回目の1日目は初めての伊都キャンパスでの開催、遠方で交通の便があまりよくないという不安感から、台湾に関する多くの著作をお持ちでその著作にたくさんのファンがいらっしゃる台湾在住作家の片倉佳史氏、ライターの片倉真理氏にお越しいただき「台湾と日本：知っておきたい基礎知識と日台の絆」、「台湾探見：台湾の歴史と今を歩く」、「台湾に残る日本統治時代の歴史建築を歩く」の三つのテーマでお話しいただいた。2日目には九州にある台湾講座というキーワードをもとに元中央研究院近代史研究所副研究員で、現在は武漢大学に在籍している林泉忠氏に「戦後台湾政治と社会」、「沖縄と台湾：アイデンティティの比較」という二つのテーマでお話しいただいた。

第三回目は、1日目のテーマを「台湾修学旅行を“社会科学”する」と題して帝京大学の山崎直也氏に「日本における台湾研究と台湾理解：台湾修学旅行支援活動の現場から」、広島県立大学の上水流久彦氏に「歴史建築にみる日台関係」についてお話しいただいた。2日目は、「東アジアのナショナリズムを考える」と題して、上水流氏に「台湾ナショナリズムと外省人の国家認識」、中央研究院台湾史研究所の呉叡人氏に「台湾と香港のナショナリズム」と題して講義を行っていただき香港情勢から台湾を考える、ナショナリズムについて考える1日とした。1日目のテーマは、2019年10月から12月にかけて早稲田大学で行われた連続公開講座「台湾地域研究と修学旅行」に自ら足を運んだ際、修学旅行先に台湾を選ぶ高校が多い九州でも同じようなご講義をお願いしたいと考え、台湾修学旅行支援研究者ネットワーク（SNET台湾）先生方に依頼した。

2020年の12月から1月にかけて行われた第四回目は、コロナ禍で日本でも台湾の優秀なコロナ対策がニュースになることが多かったことから、1日目は「日本統治下、台北の水をめぐる」と題して日本統治時代の都市計画、水のインフラ整備に関するお話しを台湾在住の文筆家である栖来ひかり氏に、2日目は「台湾史のみかた（見方/味方）—日本統治期・戦後・現代」と題して日本統治時代をどのように見るべきかを目白大学の胎中千鶴氏から、3日目は、原住民とコロナという観点でコロナ禍での原住民の生活について「境界をあぶりだす疫病—先住民の視点から」というタイトルで福岡大学の宮岡真央子氏からご講義いただき、コロナ禍にご家族で台湾在外研

究に赴き長期滞在をされた際の隔離経験についても授業の中でシェアしていただいた。最後の4日目は、慶應義塾大学の三尾裕子氏から「疫病を制御する一統治・民間信仰・民衆史」と題して台湾の民間信仰の基礎知識と新型コロナの民間信仰や宗教行事への影響について、九州大学のエドワード・ヴィッカーズ氏から「Koxinga（鄭成功）in Kyushu, Taiwan and Mainland China」と題して、鄭成功が九州、台湾、そして中国大陸でどのように評価され、祀られているのかについて、それぞれご講義いただいた。

2022年1月に行われた第五回では台湾アイデンティティを全体キーワードとして、様々な学問的方向から講義、議論を行うものだった。1日目は歴史学、ジェンダー的視点から「台湾の「日本時代」を考える」として、一橋大学の洪郁如氏に、2日目は人類学の方法から「新移民の包摂：コスモポリタンでローカルな多文化主義」として滋賀県立大学の横田祥子氏に、3日目は「中国と向かい合う台湾社会—『兩岸関係』の政治と経済」として政治学、経済学の方法からアジア経済研究所の川上桃子氏、4日目は「台湾の児童文学と郷土想像—鄭清文の文学作品を中心に」と題して日本大学の松崎寛子氏に文学の方法から台湾アイデンティティについてご講義をお願いした。

授業形式は、オンラインと対面とで少し変化があるが、基本的には講義と同じ分量の時間を対話と質疑応答に使用する。90分も質疑応答時間があるということは、講義を行う方々にかなりのご負担をかけかねないが、オンラインであっても、対面であっても一方方向ではない「対話」が大切なのだと考え、質疑応答の時間には講義を行なった方とは別に司会進行役を入れて一つのラジオ番組を聴いているような雰囲気作りを心がけている。よく90分もの質疑応答時間を設けて質問が尽きることはないのかとのご質問もいただくが、これまで一度も質問がなくて困ったことはなく、逆に一つの質問から別の方向に話が広がり、全ての質問に答えられない時の方が多い。元々履修している学生は必ず一つ質問をしなくてはならないというルールがあるため質問が途切れないということもあるが、一般参加者からもいつも学生に負けず劣らず多くのご質問をいただいている。

参加者の傾向は、第一回目から三回目までの傾向と第四回、五回の傾向は対面/オンラインとすることで異なる。第一回目から三回目まではやはり地元九州地区で台湾に興味を持っている人、近隣県の研究者、院生、学部生が多く参加していたが、各回の特徴的な参加者を挙げると、第一回目はトニー・ロー氏の自転車を通じた地域振興に関する話しが聞きたい九州の地方自治体の職員の方が多く参加していたし、第二回目は、片倉氏と直接お話しがしたい湾生とそこご家族の方が目立っていた。第三回目は呉叡人氏の話をごっそり聞いてみたい中国人留学生、沖縄出身の学生と呉氏との議論が印象に残った。オンラインの形式をとった第四回目からは、日本各地、また台湾やアメリカ、ヨーロッパからも参加者がおり、台湾スタディーズの認知度が飛躍的に上昇したように感じた。

第2節 オンライン化の波及効果：「映画を通して見る東アジア」

コロナ禍で様々なイベントが中止もしくはオンライン開催を余儀なくされたが、オンラインでの「台湾事情」の成功をベースに立ち上げたイベントが「映画を通して見る東アジア：今みんなで考えるべき問題とは」である。このイベントは、参加者が東アジア地域に関連するドキュメンタリー映画を16時から21時までの間にオンラインで視聴、その後21時から1時間専門家による講義と質疑応答がある。講義では映画の中では時間の関係上触れられていない文化的、社会的背景に関する補足を行う。

運営は少人数で行っており、映画本体は各映画配給会社にお問い合わせでVimeoという動画共有サイトにUPしていただきパスワードをかけて管理していた。参加者からの質問は、20時半までに指定したGoogleフォームに質問を書きこんでいただく。21時からの講義は、ZOOMとYouTube LIVEを使用した。このイベントは、2021年に第一回、2022年に第二回が行われたが、各回ともに、九州大学台湾スタディーズのFacebookの告知から24時間を待たずに定員（第一回目は100名、第二回目は150名）を上回る応募があり、両方の回、定員を急遽50名ずつ増やすという対応を取ったが、それでも早い段階で定員に達した。映画視聴が可能な参加者の募集が終了した後も講義のみを希望する人も多く、第一回は3日合計で571名、第二回目は3日合計で691名の参加登録をいただいた。

表2 映画を通して見る東アジア 上映映画と講義タイトル

第一回 (2021年2月26日、3月5日、3月12日)

上映映画	講義タイトルと講師
『私たちの青春、台湾』(2017)	「内」と「外」から見るひまわり学生運動 田畠真弓氏、前原志保
『709 Companions (709の仲間たち)』(2019)	今こそ考えよう！人権と民主主義 阿古智子氏、土井香苗氏
『乱世備忘 僕らの雨傘運動』(2016)	混迷する東アジアの植民地主義と主体 阿古智子氏、呉叡人氏

第二回 (2022年3月4日、3月11日、3月18日)

上映映画	講義タイトル
『海の彼方』(2017)	アジアの〈はざま〉に埋もれた歴史を解き放つ： 沖縄から見た台湾と日本の関係 黄インイク氏、八尾祥平氏
『日常対話』(2016)	かっこよくないLGBTQ：地方と貧困層の視点から 橋本恭子氏、劉靈均氏
『デニス・ホー ピカミング・ザ・ソング』(2020)	香港 あなたはどこへ向かうのか 阿古智子氏、前原志保

おわりに—これからの展望と課題—

毎回、前回からの反省を生かして次の計画を立てていくことになるのだが、現在思いつく課題は（一）オンライン/ハイブリッド/対面（学内/別施設）（二）日⇄英（中）同時通訳は今後必要か（三）地方都市、そして九州での台湾関連イベントの継続（四）広報活動の4点となる。

オンラインか対面かハイブリッドかという点に関しては、今後のコロナの感染状況にもよるが対面とオンライン両方のハイブリッドの形を取るのが現状ベストではないかと考えている。対面で行うことは、学生、参加者にとっては授業直後に講義担当者と直接話ができる、もしくは周りの参加者とも討論ができる、また講義担当者も参加者の雰囲気を見ながら授業をアレンジしていくことができるというメリットがあるが、場所は必然的に大学周辺に住んでいる九大の学生を考慮して九州大学伊都キャンパスを使用することになる。この授業が行われる土日祝日は大学への公共交通機関の便数が極端に減便になっており、大学の駐車場を無料開放するなどの対策をとったとしても、一般の参加者の参加へのハードルは高くなってしまい、第四回、第五回と世界各地からオンラインで参加してくださった方が参加できなくなる。つまりハイブリッドが現状ベストな回答ではあるのだが、そうすると次回の運営は難易度が上がりかなり入念な準備が必要となるだろう。

次に、日・英（もしくは中）の同時通訳が今後必要かどうかという点だ。最大の問題は資金面で、同時通訳を入れる場合はハイブリッドではなくオンラインのみを想定している。実験的に日・英の同時通訳をつけた第四回の台湾事情では、予算の大半を同時通訳の費用に投じる必要があった。実際に行なった第四回の結果としては、日本語から英語への通訳を必要とする人より、英語から日本語への通訳の需要が高く、この結果は英語で台湾事情を聞きたいと思う人に情報が行き届かなかった、もしくはそもそも需要がないのではないかと考えたが、それとは別に参加者は英語/中国語から日本語への通訳が入れば英語/中国語での講義を聞きたいと考えているということもわかった。この結果は今後講義を依頼する際のヒントの一つになると考えている。

三つ目の課題、地方都市、そして九州での台湾関連イベント継続ということに関しては、九州という立地を生かしたテーマを常に模索している。九州大学内で台湾スタディーズの認知度が上がってきたことによって理系の先生方からの問合せも増えてきたため、九大という総合大学の強みを生かした文理融合的なトピックが作り出せないかとも考えている。

最後に広報活動に関してだが、これは人手不足が一番の問題である。対外的に現状できることは九州大学台湾スタディーズ Facebook のページ更新と定期的なニュースレターの発行だが、2022年3月にやっと第一期（2017年10月から2020年9月）までの台湾スタディーズの取り組みに関する概要パンフレットを作成することができたというくらい広報活動では遅れをとっているのが現状だ。これからそのパンフレットをもとに九大台湾スタディーズへの寄付活動も含めて様々な場所への広報活動を積極的に行なっていこうと考えている。